

なるがよしとして、芋虫の動くにも驚き、風の葉を吹くにも心をなやますを以て、やさしげなるものやうに言ひはやし、婦人の剛徳を養ふことに、勉めざるは、戦捷國として尙更一大欠點である。なんと寒心に堪へぬことではありませんか。

春の十七字詩

鹽野奇零

正月や皆が足袋はく山の家
正月は皆鶯の心かな
正月は松に極まる朝日かな
正月や火桶抱へて梅の花
正月や心の底の改まる
荒磯や雨の二月を啼く千鳥
湖の漣寒き二月かな
氣の軽くなるや二月の草の色
池はまだ半分氷る二月かな
二月やつもらぬ雪の二日降る
掃く跡へ水の戻りぬ春の雪

春なれや雪は降りても暖かき
朝日さす樹々の光りや春の雪
藪入や上野淺草日は暮るゝ
藪入や先づ兩親の墓参り
藪入や里にかかしき京言葉
藪入の羽織短かき小僧かな

短歌

菅原櫻心

○ 神々が快樂の園に老いまさる松の大木は神さびて
榮ゆ
ともすれば若き日のこと浮び来てうれしなつかし
森蔭の家
秘めますかみ胸よ永久に秘めまさは語り明さむ日
ぞ遂になき
○ 床の間の堆朱の卓に香焚きて正氣の歌を先づ誦し
て見る
ちゝとなく小鳥に夢を破られていそぎ閑伽汲む尼
君わかき

中西竹溪